



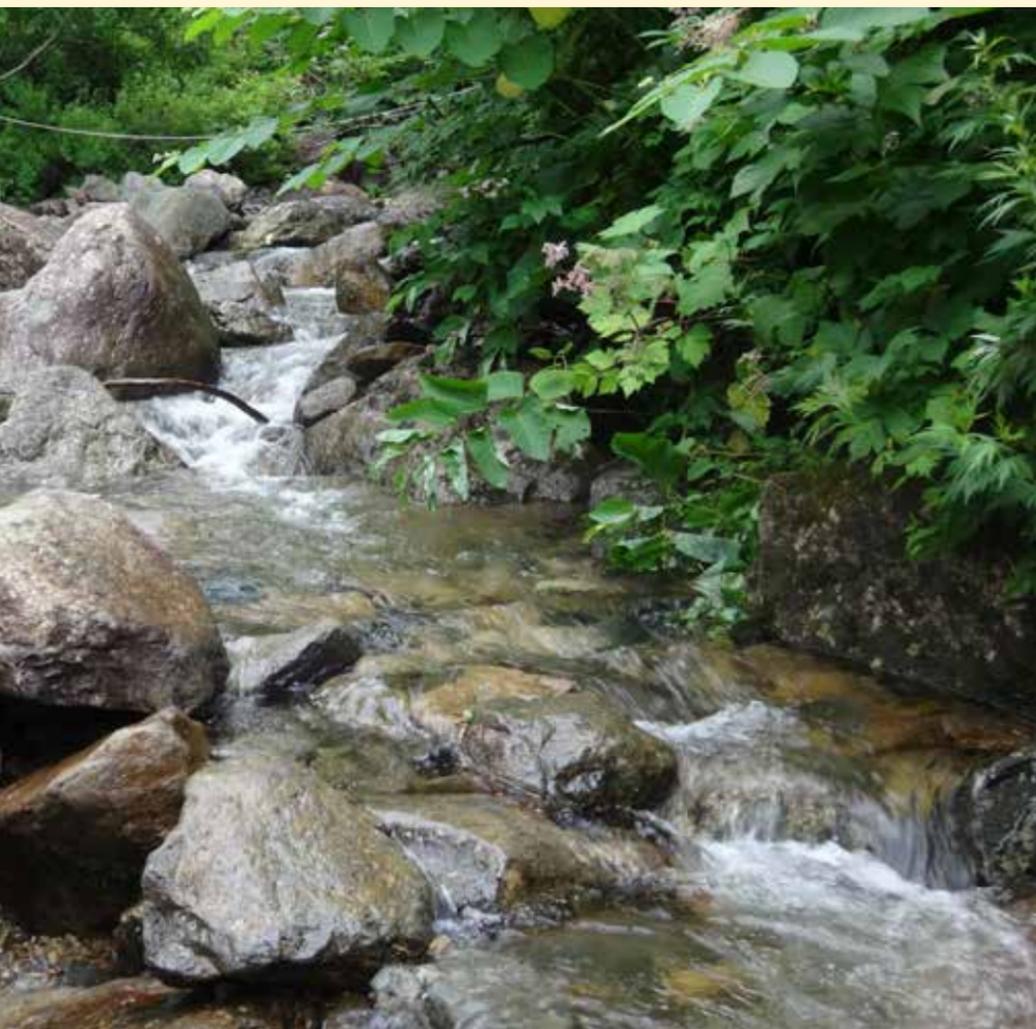
地人館
E-books

デモ版 pdf

宮沢賢治の童話を
落語仕立てで語る

賢治寄席へようこそ Ⅲ

宮澤哲夫 著



まえがき 賢治寄席ふたたび

この『賢治寄席へようこそⅢⅣ』は、前著『賢治寄席へようこそⅠⅡ』の続編です。

お断りをしなければならいことがあります。前著は「三鷹大沢・宮沢賢治の会」会員の皆さんを対象にできなかったものを、地人館 E-books のシリーズに加えていただいたものでした。この『賢治寄席へようこそⅢⅣ』からは、さらに広く賢治愛好者の皆さんがたに読んでいただけると、対象を会員から全国の賢治愛好者の皆さんがたに広げることができました。

この新しいシリーズが、賢治さんの作品を読み返す機会になればさいわいであります。作品を眠らせてはいけません。まさに「物語をして語らしめよ」でございませう。つねに作品を呼び覚まし、何度も読み返し、さらなる賢治さんからの豊かなメッセージを受けとりたいたいでございませう。

賢治寄席へようこそ Ⅲ【もくじ】

まえがき 賢治寄席ふたたび 3

口上 7

第一席「紫紺染について」(前半の部) 盛岡内丸西洋軒はてんやわんや 9

第二席「紫紺染について」(後半の部) なにっ、山男が洋行だと? 21

第三席「やまなし」(前半の部) 見上げる世界 30

第四席「やまなし」(後半の部) 二人の訪問者 41

第五席「フランドン農学校の豚」(前半の部) なんとまあ痛ましき 49

第六席「フランドン農学校の豚」(後半の部) 豚になっ58てみないと…… 58

第七席 「山男の四月」 (前半の部) 六神丸にされて 69

第八席 「山男の四月」 (後半の部) 夢、ナンセンス化への大きな装置 82

第九席 「セロ弾きのゴーシュ」 (前半の部) 手にするはおんぼろセロ 92

第十席 「セロ弾きのゴーシュ」 (後半の部) おお活動大写真 108

あとがき 120

【表紙・扉写真】 岩手県早池峰山麓の谷川 (岳川)

口上

この度もにぎにぎしくお運びいただき、まことにありがとうございます。この度ここで新しくお耳に達します（お読みいただく）『賢治寄席へようこそⅢⅣ』は、以前に皆さまがたにお届けいたしました『賢治寄席へようこそⅠⅡ』の続編でございます。つねに魅力的な語りで私たち読者を魅了し、深く考えさせてくれる、おびただしい作品を書いた宮沢賢治さんは、状況こそ違いますが、夫となったササン朝ペルシャのシャハリヤール王に、一千一夜も面白いお話を語り続けた、かのシェラザードのイメージと重なってまいります。

無比の語り手賢治さんは、まさにシェラザードに比すべき稀有けうの語り手。一度読めば二度、二度読めば三度と、賢治さんの魅力は尽きることはございません。

いつも申しあげていることではございますが、もしこの賢治寄席を少しでも面白かったとお思っていたきましたら、どうぞ賢治さんの原作にあたって、すばらしさを直接受けとっていただきたいと切にお願いをいたします。原作に勝るものはありませぬ。

では、賢治さんのさまざまな作品をお楽しみくださらんことを。いざいざ。

のです。今はこんな気持ちでいっぱいでございます。

さて今席はこれにて終了でございます。お互いに元気でまいりましょう。次席は「やまなし」でございます。ご機嫌よろしう。では。

第三話 「やまなし」(前半の部) 見上げる世界

皆さまご機嫌はいかがですか。今席は賢治さんの「やまなし」をご一緒に味わいたいと考えております。「あつ、『やまなし』って知っているよ。学校で習ったもん」とお子さんがおっしゃる方もおられますし、「おお『やまなし』か、懐かしいな」と小学校時代を思いおこし、クラスでいちばん華やかな存在であった同級生の誰かさんを思い出して、しばし感慨にふけるお方もおありでしょう。

また昔、この作品を教材として扱った、小学校の先生がたの思い出もあります。あるいは明日の授業にと頭を悩ませている現役の先生がたの思いもあります。とにかく、私ども大半はこの宮沢賢治作『やまなし』を読んでいて、いわば国民的な作品ともいえます。

この作品は、「小さな谷川の底を写した二枚の青い幻燈です」という前書きによって、五月と十二月に、ある川底で展開された二話を描いております。うらかな五月の川底でどんな物語がくりひろげられたのか。それに、もう冷たい冬の谷川の中の何が描かれたのか、さあ、二枚の賢

治さんの青い幻燈を見に出かけましょう。そこまでご一緒にどうぞ。

昔の幻燈はご存知ですよ。知っていらっしゃる、ああそれなら結構です。いわば今のスライドです。賢治さんは「二枚の」といっておりますので、動かない二枚だけの写真を連想いたします。でもここでは、動かない固定した風景だけを描いたものではなくて、連続した動画、いわばテレビに近いものとお考えください。物語はいろいろと展開していくのですが、それを象徴的に「二枚」といったのだと思います。

まずは一枚目の幻燈です。谷川の川底です。山近くのかかなり上流と考えれば、川幅もせいぜい一メートルばかり、深いところでも五十センチほど、もっと浅い流れと考えても結構です。場所によっては、木の枝などが覆いかぶさったり、青い淵を作ってくねったり、浅いところではせせらぎの音も聞こえてくるような、そんな静かな谷川を思い浮かべてください。五月のきらめく川底です。そこに蟹たちが住んでおります。

いきなり水底の二匹の蟹の子どもたちの話し声が聞えてきます。

「クラムボンはわらったよ」

「クラムボンはかぶかぶわらったよ」

「クラムボンは跳ねてわらったよ」

「クラムボンはかぶかぶわらったよ」

こんな対話ですが、続いて

「クラムボンはわらっていたよ」

「クラムボンはかぶかぶわらったよ」

「それならなぜクラムボンはわらったの」

「知らない」

と、ひとまずここで終わっております。

さあこれだけ執拗しつように「クラムボンはわらったよ」と出てまいりますので、学校の教室なら、子どもたちは、まず「このクラムボンってなにか」に焦点が集まり、それこそ蜂の巣をつついた状態になります。先生がたにお聞きしても、そんな答えが多いのです。かなりの時間が質問やら解説やらに費やされます。でも「うるさいな。なにをがががや。クラムボンとはな、○○のことに決まっているじゃやないか」などと乱暴をいってはいけないようです。じつと子どもたちの意見を聞きとらなくてはなりません。大変です。

じつは賢治文学の研究者の間でも、結論は出てはおりません。百人の研究者がいれば百の説がございます。この席でも、ここで止まってしまう訳にはまいりませんので先に進みますが、また後でもう一度。

ところが本文では、三行の川底の描写の後でまた

「クラムボンは死んだよ」

「クラムボンは殺されたよ」

「クラムボンは死んでしまったよ……」

「殺されたよ」

「それならなぜ殺された」

「わからない」

と繰り返し返され、その一行後に

「クラムボンはわらったよ」

「わらった」

となつて、クラムボンに関する会話がやっと終わるので。

これは二匹の兄弟の蟹の会話で、「クラムボンはわらったよ」と対話の主導権を握った発言が兄さん蟹のようです。弟の発言は兄さんの口真似か、それに少し変化を加えた内容かと思われまゝ。ともあれ、ここまでがクラムボンについての兄弟の発言です。その会話の途切れた箇所に、川底の情景が語られております。この川底だけが二匹の蟹にとつての宇宙です。その外にまた別の世界が広がっていることなどまだ知らないのです。

川底からはなめらかな天井を流れていく、つぶつぶの泡が見えますし、蟹の吐く泡は水銀の流れを斜めに上にのぼっていきます。川底の流れもあたりの状況につれて、急になったり緩やかになったり、渦を巻いたりしているのです。

見上げると、銀色の腹をひるがえして魚が頭の上を過ぎていきます。かなりこの場所が上流に

あれば、おそらくはヤマメかハヤ（ウグイ）、またはヤマベ（オイカワ）の幼魚でしょう。捕食のために下流から上流へ、また下流へと遊弋ゆせきしております。

「にわかにバツと明るくなり、日光の黄金は夢のように水の中に降って」きますと、「波から来る光の網が、底の白い磐いわの上で美しくゆらゆらのびたりちぢんだり」しますし、「泡や小さなごみからはまっすぐな影の棒が、斜めに水の中に並んで」立つのです。こんな川の底の賢治さんの描写を十分に味わいたいものです。

魚が「そこら中の黄金の光をまるつきりくちやくちやにしておまけに自分は鉄いろに変に底ばかりして」上流にのぼる描写も、くつきりと印象的です。乱した光の渦の中を、腹を鉄色のようにくすませて泳いでいくのです。魚の白い腹は下から見上げると変な鉄色に見えるのですね。

下流に向うときには魚は「ゆっくり落ちついて、ひれも尾も動かさずただ水にだけ流されながらお口を環わのように円くして」、影を「底の光の網の上」に落としてすべってやってくるのです。目に見えるような描写ではありませんか。口を円く開いてすつと下流へと水を滑って蟹たちの頭上にやってまいります。何をしているのでしょうか。蟹たちは不安そうに見上げます。「なぜああ行ったり来たりするの」と弟が訊ねると、「何か悪いことをしてるんだよ」とつてるんだよ」と兄が答えます。悪いことを魚はしているらしいのです。

すると、その時です。天井に白い泡が一瞬たったかと思うと、ぎらぎら青光りする鉄砲弾てつぱうだまのよななものが見え、もうさっきの魚はどこにもおりません。

賢治さんは兄の見た光景を、「その青いものさきがコンパスのように黒く尖って」いたことと、「魚の白い腹がぎらつと光って一ぺんひるがえり、上の方へのぼった」ように思えたこと、「それつきりもう青いものも魚のかたちも見えず」、光の黄金の網がゆらゆらゆれて、つぶつぶ泡が天井を流れるだけだったと描写しております。

一瞬で魚は消えました。その後にはいつもの見慣れた風景だけです。夢でしょうか。もう兄も弟も声も出ません。「居すくまってしまいました」と書かれております。

ゆっくりとそこにお父さんの蟹が出てまいります。震えている二人を見て訊ねます。こわこわ答える兄の言葉から、それが鳥というものだと教えます。

「そいつは鳥だよ。かわせみと云うんだ。大丈夫だ、安心しろ。おれたちはかまわないんだから」と子どもたちを安心させます。でも子どもたちには先ほどの光景がまだ信じられません。あの行ったり来たりして悪いことをしていた魚が、一瞬の光の渦を残したつきり、上の方に行ってしまった。あの天井を突き抜けてどこかに連れていかれてしまった。

これは強烈な印象です。それに「おれたちはかまわないんだから」って、いったいどういうこと？ 鳥ってなに？ かわせみってなに？ どこへ魚を連れていったのでしょうか。

「お父さん、お魚はどこへ行ったの」と兄さんはまた訊ねます。

「魚かい。魚はこわい所へ行つた」お父さんが答えました。

兄さんは思わず「こわいよ。お父さん」と身をゆすります。お父さんは子どもの前で、この世

界の真実を語ったのでしよう。子どもにはどういふことかは分りませんが、この瞬間に、本能的な恐ろしさを感じたのでしよう。ただ怯えるばかりです。

お父さんは天井を流れる樺の花を見上げて、子どもたちの心を落ち着かせます。泡と一緒に白い花びらがすべっていきます。ここでようやく弟が「こわいよ。お父さん」と叫びます。弟もなにかを感じたのでしよう。

「そら、樺の花が流れて来た。ごらん、きれいだろう」と言うばかりのお父さんです。その声も何か空しく聞こえるのは、私めばかりでしょうか。皆さまがた、いかがでしょう。

「光の網はゆらゆら、のびたりちぢんだり、花びらの影はしずかに砂をすべりました」という描写で、五月の明るい昼間の川底を描いた一枚目の幻燈は終わっております。

*

二枚目の幻燈は、十二月の同じ川底の夜の風景です。

一枚目の五月からおよそ半年後ですので、蟹の兄弟もすっかり成長しました。「底の景色も夏から秋の間にすっかり変わりました」と書かれておりますように、川底の風景もかなり変化しようです。秋の台風による増水などで、上流から石や砂などが流れてきたりしたはずで、「白い柔かな円石もころがって来、小さな錐の形の水晶の粒や、金雲母のかけら」も流れてきたようです。

そんな十二月の冬の夜、「そのつめたい水の底まで、ラムネの瓶の月光がいっぱい透とおおり天井では波が青じろい火を、燃したり消したり」しているのです。五月の幻燈よりいっそう青の

色彩が深まっていて、ラムネ瓶のような月の明かりが水底まで射し込んでおります。あの二人の蟹は見えますか。いましました、あんな所に。おや何をしているんでしょうか。

なんと二人で泡比べです。どちらが大きな泡を出せるのかなんて、やっぱりまだ子どもですね。弟もすっかり大きくなって、なんでも兄さんと比べたがりです。どこの家庭でも同じですね。ほう、お宅でも、さようですか。それになにか怪訝けげんそうなお顔で。

水の底でよくあんなに泡が出るかなんて不思議だと。蟹が半分ぐらい水面から顔を出していれば、空気の泡はぶくぶく出るかもしれないが、あんなに深い所で泡を出し続けることはできないはずだと。なるほど。私めにもそこところはよく分りませんが、まあまあここは物語だということ、細かいことは。

兄と弟の泡比べはなかなか勝負がつきません。そこにお父さんが出てきて「もうねろねろ。遅いぞ、あしたイサドへ連れて行かんぞ」といいます。

イサドに明日行くことになっていたので、嬉しくて眠られなくて、外に出てきて泡比べなんかしていたんでしょうか。イサドってどこかこの川の中の楽しい所なんでしょう。私どもならさしずめ、遊園地だとか観光地だとか、子どもの楽しみにしている場所でしょうか。賢治さんの他の作品「種山ヶ原」では、岩手県江刺郡の岩谷堂いわやどうがモデルとされる伊佐戸が、「伊佐戸の町の、電気工夫の童わらわすあ、山男に手足しほ縛らへてたふうだ」と、山で霧の中に倒れた達二少年に聞こえてくる恐ろしい言葉として使われていました。でもここでは、連れて行ってもらえる楽しいイサド

なんでしょう。

夜遅くまで興奮して燥はしいでいて、お父さんに「早く寝ろ」なんて言われている子蟹たちが、首をすくめている風景です。まだ遊んでいたのです。

その時です。トブンという音とともに、黒い円い大きなものが天井から落ちてきました。ずっと沈んでゆっくり上のほうにのぼっていきます。

「かわせみだ」と子どもたちは頸くびをすくめます。いつかのあの恐ろしさがよみがえります。ゆらゆらと天井にゆられているその円いものは、下流に静かに動いていきます。

遠めがねのように両目を延ばしてじっと見ていたお父さんが「そうじゃない」と安心した声を出します。「あれはやまなしだ、流れていくぞ、ついて行つて見よう。ああいい匂いだな」と後を追います。遠めがねって？ ああそれは望遠鏡とか双眼鏡のことですよ。

子どももあわてて後を追います。いい匂いが水の中いっぱい漂っています。三匹とその黒い影法師の六つが、ぼかぼか流れていくやまなしの円い影を追いかけます。やがてそれは木の枝でとまりました。そのあたりを賢治さんは、「間もなく水はサラサラ鳴り、天井の波はいよいよ青い焰ほのおをあげ、やまなしは横になって木の枝にひっかかってとまり、その上には月光の虹がもかもか集まりました」と素晴らしく描いております。

「やっぱりやまなしだよ よく熟している、いい匂いだろう」とお父さんはいいます。

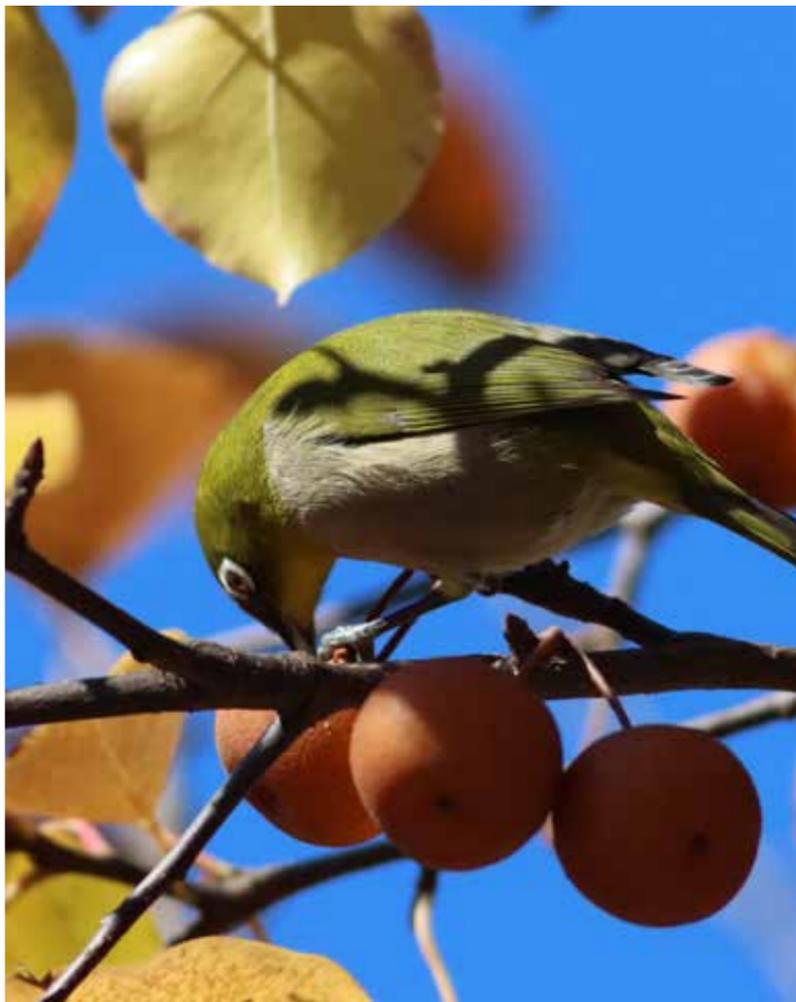
これまで熟すまでじっと枝についていた大きな実が、蟹たちへのプレゼントのようにトブンと

落ちてきたのでしょうか。いい匂いです。

「おいしそうだね」という子蟹に、「待て待て、もう二日ばかり待つとね、こいつは下へ沈んで来る。それからひとりでおいしいお酒ができるから」とお父さんは帰ろうと促します。いい匂いはお酒の匂いなんですね。明日はイサドにも行けるし、二日もたてば美味しいお酒も飲めるし、このやまなしは楽しみを連れてきてくれたのですね。最後に賢治さんは「波はいよいよ青じろい焰をゆらゆらとあげました。それは又金剛石こんごうせきの粉をはいているようでした」と書いて、二枚目の幻燈のスイッチを切るのです。

でもまだダイヤモンドの粉のような青い光の波が、私たちの瞼の中にゆらめいて流れていくのが見えませんか。ああ、天井の波がゆれて流れていきます。

さて、一枚目の五月の風景、二枚目の十二月の風景、いかがでしたか。賢治さんが「私の幻燈はこれでおしまいであります」とこの作品の幕を下ろしたように、私めの今席のおしゃべりもこれで終わりであります。次席には、後まわしにしておりましたクランボンについて、またこの水中の世界と私も人間の世界を分ける「水面」という一枚の紙のようなものを考えております。さらに「かわせみ」と「やまなし」の二人の訪問者を考えてみたいと欲張っております。ではお楽しみに。



ヤマナシの実 和梨の野生種で秋に実が熟す。この写真ではメジロが実をついばんでいる。

第四話 「やまなし」(後半の部) 二人の訪問者

さて今席もお出かけたいただき、ありがとう存じます。皆さまとご一緒に考えてみたいと思う点が三つほどございました。覚えておいででしょうか。

まず、克蘭ボンって何かということでした。前席でも触れましたように、これは小生と先生とが、この作品を教材として取り上げるならば、この「克蘭ボンとは何か」は(少し大げさないいかたですが)これからも続く永遠の謎ともいえます。

これまで(どれほど多くの方が)それぞれ考えから発言なされたでしょう。百人の研究者がいれば百の克蘭ボン説があった、と前席でも申しあげました。

まず、水に縁のある生物から、

「アメンボかミズスマシだ」。

「それが跳ねてかぶかぶ笑うんだから、きつとエビだよ」。

「殺されたよとか死んだよからはどうしても生物だ。水中生物以外はないな。いろんな虫なん

かがいるじゃないか」。

「プランクトンなんかはどうだ」。「ああそれもそうだな」。

などがありますが、また別の考えもあります。

「いやそれはきみ皮相的な思考だよ。死んだっていうのも何かの表徴ひょうちゆうかもしれない。別に生命でなくたっていい。たとえば泡だ。跳ねたり踊ったり笑ったりして消えていくじゃないか」。

「そんなら水面の光の反射だって考えられるよ」。

また克蘭ボンなんて日本語離れた語感からも、さまざまな説が提示されております。

「クラブのもじりの蟹さ」。

「なに、フランス語のカエルさ」。

「克蘭プって言葉もあるよ、瘻けいれんだ」。

「それをいうなら克蘭ボンってのもある。登山用具のアイゼンだけだね。あはは」。

「それはないな」。

また登場人物からみて、

「この作品にはお父さんはいるけれど、お母さんがいないな。死んだお母さんが克蘭ボンの正体さ」。

「ふうん、お母さんねえ、でもねえ」と、なんともはや、話は尽きません。

でも作品からは「跳ねて、笑って、殺されて死んだ、ある生命体」としか分かりません。でも謎

を含ませて、これはこれでいいのではないかと私めは考えております。

たとえば「みなさん、クランボンとはアメンボのことです。さあ先に進みますよ。そして子蟹たちは……」なんて授業が進められたら、つまらないですよね。

ここではいったいなんのことだろう。なんてこの作者は変な言葉を使うのだろう。変な作品だなあ。こんな変なことを書いている、この宮沢賢治って奇妙な人だなあ、と思うほうが、ずっとずっと大切だと私めは考えるのです。いま結論を急いで出す必要はありません。そうです、この賢治という人のことを考える時はきつときます。それは必ずやってまいりますよ。私め、このクランボン問題をこのように考えております。

さて、次に考えなければならぬのが、蟹たちの住んでいる「世界」という問題です。なにを今さら、きまつているじゃないか水の底だよ。そうです水の下です。では水の底とは？ 改めて考えてみます。

蟹たちの住んでいる「水中の世界」は彼らにとつての現実の生活の場です。川の状態はいつも一定ではなく、増水することもあれば、減水して顔を出すことだってあります。これが川の実態でしょう。しかしこの作品の設定はそうなつてはおりません。常に水中の世界だけが子蟹にとつては全世界であると、ここでは図式的に考えておきます。すると天井より上にある世界は彼らには未知の世界「外界」です。そこではどんなものがあり、どんな生活が行われているのか不明なのです。

この「水中の世界」と未知なる世界である「外の世界」。これを隔てている境界は、常に波だつて動いている「水面」という天井です。蟹から見れば、いつも見上げている天井ですが、外界から見れば、流れている川の水面です。

水中を「現世界」とすれば、波立つ天井より上の世界は「未知の世界」、驚きの世界です。そこには空気というものが満ちています。水中の魚や蟹は外界の空気の中では生きられません。逆に外界の鳥や動物や人間は水中では生きていけません。空気を呼吸できるかどうか、その世界を隔てる決定的な境界線です。

「水面」というこの一枚の紙。なんとというふしぎな存在でしょう。これが「内なる世界」と「外界」という二つの世界を分けるものです。そこには常に何かが流れています。そのさまざまなものたちは、私どもが汽車や電車に乗ったとき車窓に流れていく外界の景色と同じものです。泡が流れ、花びらが流れ、また考えかたを変えれば、時間さえもが流れていくではありませんか。

さて、この外界からの訪問者、一人めは「かわせみ」、一人めは「やまなし」、この二人の訪問者はこの作品で、どのように書かれているのでしょうか。

一枚目の春の幻燈には、いきなり飛び込んできて、一瞬のうちに魚を上方へ連れ去った無気味なものとして鳥の「かわせみ」が登場いたしました。二枚目の冬の幻燈では、トブンと落ちてきた植物の「やまなし」が描かれておりました。この二人の訪問者を比べて、あれこれ考えてみることにいたします。二人とは奇妙ですか？ 賢治さんも二人と考えていたかもしれません。

かわせみは小さなきれいな鳥で、川辺に住んでいます。この頃は川辺でよく見られるようになりました。カメラを構えた人たちが、魚を捕まえる瞬間を狙って、何時間も草陰で待ち構えています。いろいろなポスターなどでかわせみをご覧になった方も多いことでしょう。

蟹の兄さんは「青くてね、光るんだよ。はじがこんなに黒く尖ってるの。それが来たらお魚が上へのぼって行ったよ」とお父さんに報告しておりました。魚の行先を「魚はこわい所へ行った」とお父さんは子蟹を震え上がらせておりました。この外の世界「こわい所」は死という言葉こそ使ってはおりませんが、恐怖感や不安感を与えるものとして登場しております。魚にとって上の世界は「こわい」ところだと、お父さんは説明しました。うらうらとした春の幻燈ですのに、それとは裏腹にかわせみは不気味な訪問者でした。

それに反して、二枚目の幻燈では、冬の寒い季節の凍えるような水の中の物語ですのに、上から落ちてきたやまなしは、植物という違いがあるのかもしれませんが、蟹たちに喜んで迎えられ、歓迎されている感じで描かれております。いい香りを放ち、二日もすればおいしいお酒にもなるという未来への希望さへも携えての登場です。賢治さんもこの二枚目の登場者「やまなし」をこの作品の題名に選んだ理由が少し分る気もいたします。私めでしたら「蟹の親子」だとか「水の中から」なんてつまらぬ題名にしたかもしれませんのに。

ではもう一度、二人の訪問者の出現した場面だけを比べてみましょうか。

かわせみはあつという間のまさに瞬間的な訪問です。水面がきらりと泡の渦を巻いてざわめい

た時には、もうここにはいなかったのです。そして魚の姿も見えませんでした。荒々しい天井からの不意の訪問者。子蟹たちに残したのはただ恐怖の念だけでした。

ところがやまなしの場合はどうでしょう。トブンという音とともに黒い大きなものが落ちてきたというのですが、それはゆつくりと沈んできて、しばらく止まり、やがてまたゆつくりと川の流れて押し流されながら、下流のほうにばかりと浮かんていったのです。初めこそ蟹たちを驚かせたものの、ゆつくりした訪問ぶり、しかも追いかけてみたい気持ちにさえ誘うものとして登場しました。「一瞬」と「長い時間」、「垂直」と「距離の長さ」など時間や空間の違いが際立っております。

おっと、思わず私め、やまなしの肩を持つ発言をしてしまいました。かわせみにだつて、言いがあのです。こんなことをいうかもしれないよ。

「なんじゃ、おれが歓迎されぬ訪問者であつたぞ？ 馬鹿をいうな。おれも生きるためには食べなくてはならぬのだ。おれの食べ物小さな魚や水中昆虫の幼虫なのだ。おれの捉えたあの魚はおれの命をつなぐものなのだ。そのために川の近くの土手などに巣を作つておる。正式な名を名乗ろう、驚くな。「ブツボウソウ目カワセミ科カワセミ」というのだぞ。

おれの自慢は、どうだ、身体こそ小さいがこの美しさだ。濃紺のうこんのこの頭と羽のみごとな色のつややかさ、背中のこの鮮やかなコバルト色を見てくれ。そしてこの胸から腹への赤い褐色。ふん、こんな美しい鳥を見たことがあるか。あるまいよ。まさに飛ぶ宝石だぞ。それにこの自慢の大き

な嘴だ。賢治さんはコンパスのようだとおぼえておる。じつにうれしい。おれの兄弟にはな、あの星になったよだかや、おれに似て美しいハチスズメもいるのだ。これは「よだかの星」という本に書いてあるから確かな話だぞ。ぜひ読んでくれたまえ。

ただこの作品「やまなし」では、不意の訪問をして、世間をまだよく知らぬ子どもたちを怖がらせてしまったとのこと、気の毒であった。詫びよう。それがその子どもたちのトラウマにならぬことを願う。でも世の中はこの恐ろしくも厳^{げん}粛^{しよく}な事実からなっていることから目を背けてはならぬのだ。目をそらすだけでなく、この厳^{げん}しい世界を直視^{ちよくし}することも必要なのだ。水の中だけが世界ではない。世界は広いのだ。それを知り、乗り越えて大人になるのだ。おれの出現はそのための一助になったのではないかと、蟹の兄弟には伝えてほしい」と。これはかわせみからの蟹の兄弟への伝言でした。

最後にやまなしからの蟹さんたちへの伝言があります。代読いたします。

「小さな音とともに、外の世界からあなたがたの住むこの川の中に落ちたのは、近くにわたしのお母さんの木があったからです。今年の最後まで残っていたのですが、やはりお母さんの木から離れる時がきたのです。あなたがたのお父さんはわたしの正体を知っていて、しばらくするとおいしいお酒になると楽しみにしてくれました。嬉しいことです。流されていくわたしをどこまでも追ってきてくれて、わたしも幸せです。

川の中だけがすべての世界だと思わないでください。外にもっと広い大きな世界が広がって

て、楽しい生活が繰り広げられておりますよ。私はバラ科植物のやまなしですが、鳥だとか、動物だとか、さらには人間なんて生き物たちで満ち溢れた世界が、あなたがたの天井の上に広がっているのですよ。川の水が少なくなったら、勇気を出して覗いてもらなさい。この賢治さんの作品の題名に選ばれて、何ともいえないほど光栄に思っています。もともと多々のかたにこの作品を読んでいただきたく願っております」と。

さてこれにて「やまなし」についての二回にわたった私めのおしゃべりを終了いたします。次席は「フランドン農学校の豚」をとりあげたいと思っております。お名残惜しくはございますが、また次の機会に。ご機嫌よう。お元気で。

あとがき

前著『賢治寄席へようこそⅡ』と同じように、本書も賢治作品を広く皆さまがたに楽しんでいただけるように、一つの作品を「前半の部」と「後半の部」に分けて一席としました。前半では物語の流れを概観し、後半では、思わぬものがそこから見えてくるのではないかと期待しながら、違った角度からの読み直しの試みをいたしました。作品じたいから離れてしまった感もいたしましたが、それは楽しみかたの一つだとお許しいただきます。

各席の長さは一定しておりません。そのため、Ⅲ部、Ⅳ部でバランスのとれるように、それぞれの部のなかで、短かなものから長いものへと配列してあります。ただ、作品はそれぞれ独自の価値をもっておりますので、その長短と作品の優劣とはまったく関係はございません。

本書も前書と同じように、くだけた表現による高座形式をとりましたので、注記は特に記しておりませんし、学説での論者のお名前も失礼させていただきました。いろいろな方面からのご叱責もございましょうが、今回もまたお見逃し願います。

なお本書の作品引用部は現代語表記の『宮沢賢治コレクション1～5童話』2016～17年（筑摩書房）によりました。なおルビは適宜、省略・補足いたしました。

令和4年4月

宮澤哲夫



宮澤哲夫 (みやざわ てつお)

1935 (昭和 10) 年 長野県松本市生まれ

早稲田大学第一文学部英文科卒業

東京工業高校 (現・日本工業大学駒場高校) 勤務 (1961~2000)

宮沢賢治研究会会誌『賢治研究』編集委員 (1992~2002)。

宮沢賢治学会イーハトーブセンター理事 (1999~2002 / 2009~12)

鎌倉・賢治の会会長 (2005~14)・現顧問

三鷹大沢・宮沢賢治の会主宰 (2015~)

[著書]

『宮澤賢治 童話と〈挽歌〉〈疾中〉詩群への旅』蒼丘書林 2016

『賢治寄席へようこそ』 I・II・IV 地人館 E-books

[受賞]

第3回宮沢賢治学会イーハトーブセンター功労賞 2018

賢治寄席へようこそ III

著者 みやざわてつお 宮澤哲夫

初版発行 2022 年 4 月 30 日

発行 ちじんかん 地人館

〒 116-0014 東京都荒川区東日暮里 6-56-6 長戸ビル 3 階

Tel 03-6806-7937 Fax03-6806-7937

<http://chijinkan.com>

©2022 Tetsuo Miyazawa